

---

# だぶるお ~ こわれ逆行で行こう！

アンナ・D・メタボ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だぶるおゝ こわれ逆行で行こう！

### 【Nコード】

N7363Q

### 【作者名】

アンナ・D・メタボ

### 【あらすじ】

機動戦士ガンダム00の二次創作。オリキャラ&チートキャラ大暴れ。

殆どが壊れ系ギャグ、…のつもり。

各外伝&劇場版のネタバレがのっけから有り。

模型誌の非公式作例を知っているとちよつと楽しめるかも。

手違いで、注意事項を頭の人物紹介冒頭に書いてます。そちらを少しお読みになってからプロローグへどうぞ。

> 5 / 3 1 追記

諸事情により、仮ですが完結と致しました。詳細は最新話を御覧下さい。  
<

## 人物紹介（途中、経過による改稿あり）（前書き）

処女作になります。ダブルオーのチート&現実参入キャラの逆行物。偶々、購入したアストレアFのガンプラパチ組から電波が飛んできました。

原作知識は劇場版と小説版以外は大体。

現実からのキャラがどうかで見た事がありそうなのは内緒で。

（モデルが存在します、アニメキャラじゃないので此処では言いませんが）

以下の要素がお嫌いな方は”ぶらっざばっく！”で。

- ・チートキャラ嫌い
- ・妻子持ちおっさんが活躍
- ・バリバリの関西弁キャラが複数いる
- ・（原作キャラ）が何でそいつと！？
- ・原作死亡キャラが生存 or 生存キャラが死亡

…では、上がokのかたはどうぞ！！

## 人物紹介（途中、経過による改稿あり）

### オリキャラ紹介

現実からの介入者（ 作中ではマイスター名で呼称）

あきみや ほつじ  
・秋宮芳慈

普通の大阪にある建築会社で働く35歳の作業員。嫁と息子・娘がいる二児の父。

突然、親友2人と共に、謎の者の手で”西暦2292年”に送り込まれ、

ドタバタになりつつも自分なりの世界改革を行う。

マイスター名はヘンリー・T・オータム。

嫁がいない事を良い事にフラグ壊しを計るが…………

なつの ひろみ  
・夏野洋巳

ヘンリーと同じ会社の同僚。部署は作業機械のメンテナンス。

同僚だが年齢はヘンリーの一つ上。嫁と娘がいる。

親友のヘンリー&ユンと共に”西暦2292年”に送り込まれた。ハッピーエンドが好みらしく、死亡フラグ回避に力を注ぐ。

マイスター名はヒィ・シエイエ。

ヘンリーの行動から、嫁が来る事を予測してフラグ立てを我慢していたが…………

はるかわけ ゆうじろう  
・春川優治郎

ヘンリー&ヒィと同じ会社の同僚。部署は事務処理。

ヘンリーと同じ年だが、独身貴族。3人の中でイケメンだが性格が変態。

親友のヘンリー&ヒィと共に”西暦2292年”に送り込まれた。

なお、彼ら3人が親友になったのは、酒の席でのエロトークで意気投合したとか。

マイスター名はコン・ヴィスナ。

唯一の独身を良い事に、積極的に女性陣にアプローチを掛けている。

謎の者、というかチート介入者たち

・バン＝ベルク

本当の名前はヴァン・ヴェルクらしいが、

ヘンリーが「舌を嚙んでむずい！」の一言で改名。通称・バンベル。

自称・西暦2792年のイノベイダー型ELS。

見かけは黒髪赤目の小柄な日本人。しかも、3人に合わせてか関西弁を喋る。

現実世界の3人を”西暦”に送り込んだ張本人。

当人曰く、「未来をハッピーな方向に進める為に、パラレル化覚悟で送った」。

何かと神妙な力を”これがイノベーターの力”と吹聴する。

単独で全て出来そうな気もするが、

他の仲間では完璧すぎてつまらないので送つたらしい。

・ハイデン＝ミラージュ

バンベルの仲間。物資の運び屋兼技術スタッフ。

バンベルより年上らしく、バンベルもさん付け。

姿は修理工の格好をしたロングポニテブラウンヘアの大柄チョイデブ。

バンベル&三人の呼び名はミラージュから鏡さん<sup>かがみ</sup>。

狙撃も得意らしく、非常時に狙撃もこなす。

真面目な人なのでツツコミに回る苦労人ポジ。

・リメイク＝リロード。

バンベルの仲間。主に資金援助と外交役。

姿はスーツ姿の長身やせ形で暗い茶色のショート。関西弁を喋る。

バンベルがマナと呼んでいるので、3人もマナさんと呼んでいる。

知恵役で難しい事は一手に引き受ける。

ツッコミ役その2。主に間違い修正。

”ハゲ”という言葉に若干敏感。

#### ・テンダー・ブイツー

バンベルの仲間。主に諜報とか敵対組織の行動誘導。

姿は彼らの前に現れる時は、紺の作務衣を着たデコ出し金髪セミシ

ョートの髭面。

バンベルがルー兄と呼んでるので、3人もルー兄さんと呼んでいる。

バンベルすら「意外とツンデレ」と言わしめる程のツンデレで気分

屋。

気分一つでハードルを上げたりするので、フロローに走る鏡とマナの胃痛の種。

## 登場MS設定（進行による改稿有り）（前書き）

一部、ネタバレを含みます。

但し、先行で公開したMSは、本編が追いつき次第設定公開。

名称隣にある出典先略称

無印↓TV版&劇場版、P↓OPP、

F↓OFF、I↓OOI、I2↓OOI2314、

V↓OOV&V戦記、N↓OON、

BV↓模型雑誌の非公式作例、

オリジナル↓α

## 登場MS設定（進行による改稿有り）

フロマデイトス所有

・エイスパシア：α

バンベルより貰った戦艦。ガデラーザに類似していおり一回り小さい。

本家と違い、ガンダムヘッドも無ければ大型アームもなく、ミサイルコンテナはカタパルトと化している。

ファングは制御上の関係から小型のみしか搭載していない。

しかし、搭載ドライブが特製の大型純正太陽炉2基にサブにMSサイズ用2基と、

本家より少なくとも1.5倍以上は出力が高い。

・ガンダムエクストレア：α

初期にバンベルより貰ったガンダム。特製の純正太陽炉を搭載。オリジナルと違い、HGキットにあったエクシアとの相互換装が可能。

名前の由来は現在不明。今のところはアストレアFと呼称中。

普段は正面から見て左半分はアストレア、右半分はエクシアの外観で、

ヘッドはアストレアのガンダムタイプ隠匿マスクを付けてたショートアンテナ。

上半身・アストレアの下半身・エクシアの様に、

状況に応じて部位単位で換装をしている。

武装はアストレアF重武装にエクシアの武装を追加したもの。

なお、高機動及び長時間トランザム仕様に、

全4カ所のハードポイントに粒子貯蔵タンクを装備したタイプも

ある。

GNブレード（ロング・ショート）、GNソード（プロト・エクスピア仕様）、

GNシールド（アストレア・エクシア）、NGNバズーカ、

GNサーベル、GNビームダガー、GNビームライフル、

プロトGNランチャー、GNビームピストル、GNハンマー、

GNハンドミサイルユニットの計14種18個。

・サキユキ

2364年に量産されたサキブレをプロトデイマス用にチューンしたもの。

邪魔になる脛にあったバランサー用大型フィンとツールコンテナが廃され、

代わりに背部のスラスタに作業用アームとビームトーチアームを装備している。

色も色とりどりでガンダムを意識した配色から、

ドイツ戦車の迷彩に使われるレッドブラウン一色に染められた。

頭部及び胸部のレンズも緑から黄色へと変更している。

元が作業用MSだった為、戦闘には全く適さない。

名前の由来はサキブレⅡ先触れ、と解釈した上での”先行き”。

・ヤフェテ：V

セラフィムの強化プランだった3Gの搭載機だったセムを有人仕様化。

グラビカルアンテナは内蔵されて、変形を量産及び構造上オミットされた。

セムとの区別を付ける為、セムと同じノアの息子であるヤフェテが愛称に。

なお、膝のハードポイントは、GNビームマシンガン他、GNソード？の一部であるGNガンブレードも装備可能。

腕及び脛のレンズはアストレアにあったコネクタも存在する。

・ガンダムセダクピア（Sadachbia）：α

詳細不明。青い機体らしい。

名前の由来は、”秘密の幸運星”の意味を持つ水瓶座γ星サダクピア。

と、言う事は……………！？

チームトリニティ

∴ Coming Soon

????

∴ No Data

**登場MS設定（進行による改稿有り）（後書き）**

所々、虫食いですが公開。

最後の???はちよこつとバラすと、

2ndの時間軸から登場の第4勢力です。

先は長いですが、お楽しみに。

## ぶろろーぐ・嵐の前途多難（前書き）

俺、秋宮芳慈。<sup>あきみや ほうじ</sup> まあ、普通の嫁がおる二児のおっちゃんや。  
おつかしーなあ、昨日眠る前は普通に嫁と一緒に布団で寝とったの  
に何でこんな所に

おんねや。

なーんか、宇宙みたいな所におるなあ。服もよう見たらパジャマの  
ままやし。

ん？ あそこに入っぱい形の赤い何かがある。幽霊か？？  
取り敢えず、俺は赤い人型のような光に近づく事にした。

## ぶろろーぐ・嵐の前途多難

ホウジが赤い光に近づくと、声が聞こえた。

「おめでとう。あんた、ラッキーな人やで」

「え？ 何がや！？」ホウジが声の主に疑問を投げかける。

「名誉ある”西暦”への武力介入第一号や」

人型の光はえっへんとした姿を取る。

「”西暦”ってなに？？」

「あー知らへんのか、ソレスタルビーイングって知つとるか？」

「知らん」ホウジはバツサリと声の主に答える。

「あちゃー、ダブルオーも知らへんのか…。これは困ったなー」  
人型の光は頭を抱える仕草をとる。

「だぶる・おー？？ オーズやったら知つとるけどなあ」

「それは仮面ライダーや。最近終わったガンダムを知らへんのか？  
？」

「あれか、赤い角付いたごっついロボットが出てくるー」

「それはファーストや。古すぎる！」

「”ガンダム”って出されても、それしか出てこうへん」

「あー、もう！ アンタの知り合いを巻き込むしかないなあ」

パチンと指が鳴らした音が聞こえるとこの場にもう2人現れた。

一方の小さい男が夏野洋巳、もう一方の長身の男が春川優治郎。  
共にお互い親友と呼べる仲の知り合いだった。

「うーん、此処は何処や？？」

「あれ、美人のネーちゃんとお酒を飲んどったのに…」

お互い寝ぼけ眼をこすって回りを見渡す。

「なー、ひいちゃんにゆうやん。ダブルオーって何？？」

ホウジはヒロミ&ユウジロウに早速先ほどの事を尋ねる。

「うわっ、ゆうやんとほーちゃんがかったのか。」

ダブルオー、知らへんのか？？」

「あ、ほーちゃんとひいちゃんやないか。

だぶるおー？ それやったらボインヒロインが多いガンダムやろ」

「ふーっ、知つとる人がおつて助かったわ」

人型の光は安堵の息を漏らす仕草をする。

「で、おたくは誰や？」

ホウジ達三人は赤い光の主に正体を尋ねる。

「別世界から来たイノベーター 型ELS」

「インベーター」は分かるけど、”えるす”って何や？？」

ホウジはヒロミ&ユウジロウに尋ねる。

「劇場版に登場する奴やろ。えーっと、何やったつけ？？」

ユウジロウは知らないらしく、ヒロミに助け船を求める。

「異星人みたいな奴やろ。」

確か、”テカテカした何でも取り込む金属生命体”やなかったっけ」

ヒロミは正確ではないが大まかにELSをホウジに解説する。

「大体合うとるね。後、インベーターやなくて”イノベーター”」

赤い光の主は訂正をする。

「…些細な間違いやろ？」

ホウジは赤い主にしれっと言う。

「イノベーター は説明が難しいなあ、”異星人”に近い言ったら近いけど…」

「ガンダムを知らへんから、ニュータイプって言っても分からへんし」

ヒロミとユウジロウはイノベーターの説明に頭を抱えた。

「にゅーたいぷ？ あー、何か”ピキーン”とか音立てて突然避けたりする奴か」

ホウジはふと思い出した事を口にする。

「そんな感じや、予知能力つちゅう奴やな」

「…にしてもや、何で世界を超えてやってきたんや？」

ユウジロウが赤い光の主に問いかける。

「ハッピーエンドへ世界を変えて欲しい。」

最悪、分化されてパラレルになってもかまへん」

「歴史が変わったら、其処から分化されるっちゅう話か」

「どー言う事??」

ホウジは2人と赤い光の主の話について行けず、質問をする。

「うーん。」

一本の木あるやろ、地面に近い所は一本やけど、

空に向かっていくと枝分かれするやん?

世界もそういう風に枝分かれしていくんよ」

ヒロミが樹木に例えて説明するが、ホウジはまだ傾げている。

「RPGとかでセーブデータ一杯作れるやろ、アレや。」

最近のゲームは色々結末あつて複雑やん、攻略本見て一端セーブして、

そこから他のルートに行ったら別にセーブする。そんな感じで、  
ま、恋愛ゲームで別な娘付き合う為にイベント変えてみるっちゅう事や」

「あー分かった。可愛え娘と付き合うには遊園地に付き合ったけど、  
クールで格好いい娘と付き合う為にバーへ飲みに行ったと」

ユウジロウの説明でホウジは漸く納得する。

「そーそー、女絡めると分かんねや」

赤い光の主はうんうんと頷いている。

「まさかやと思うけど、”裸一貫で頑張れ” ちゃうやろな??」

ヒロミは赤い光の主に尋ねる。

「流石にそれはない。一応、小型戦艦を用意しておく。」

こんな感じやったかな??」

赤い光の主と3人の間に小さい立体映像が浮かび上がる。

どうやら、3人が所有する戦艦の縮尺模型のようだ。

どことなく、戦艦の形が劇場版に登場したガデラーザに酷似している。

「なー、これってガンダム頭が無いガデラーザちゃうんか？」

E.L.Sを知っていたヒロミがフォルムに突っ込む。

「せやねえ。大きさ的には本家の3分の2程度、

本来アームの部分と頭がある所がカタパルトやね」

「え、フアングはあるの!？」

ユウジロウはオリジナルにあつたフアング搭載に驚いた。

「ミサイルコンテナをカタパルトにしとるからね、

流石に大型フアングは無い」

「まあ、俺ら普通の人やもんな。脳粒子波で分かり合う事も出来ひんし」

ヒロミは納得した。普通の人がやれる事は限られる。

「…えーなあ。俺、前知識持つてへんから今一分からん」

赤い光の主と盛り上がり上がっている2人を見てホウジは羨ましそうに眺めている。

その視線に気付いたのか、赤い光の主は戦艦モデルを消してホウジに近づく。

「ー置いてけぼりは可哀相やな。ちょっとバチつと来るけど我慢しとき」

そういつて赤い光の主は手をホウジの額に当てるような仕草をする。一瞬、ホウジが光に包まれた。光が消えると赤い光の主はホウジから離れる。

「…これでOKや。」

無理矢理、基礎知識を叩き込んだから、

最初は『ふーん』って聞き流しとけばええわ」

「何となく、分かったような気がする」

ホウジは不思議な感覚にちよつとぼんやりしている。

「まあ、世界に慣れれば何となく分かるから」

ユウジロウはぱっとしないホウジの肩を叩いて元気づける。

「…で、MSは無いの??」

ヒロミは赤い光の主に更に尋ねる。

「もちろん、ありますがな。で、どれにする??」

ぱつと、4人の回りが変化して、

がらつとガンダムタイプ of MS の絵がぐるぐると回っていた。

「じゃ、これはどうや??」

赤い光の主は3人にダブルオークアンタを出した。

「…いきなりこれですか!??」

「流石に、量子テレポートとかクアンタムバーストはのっけから使えへん」

「…却下、チートメカで無双しても楽しい」

ホウジの一言でクアンタの絵を消してアブルホールを出した。

「どうや? 腕無いけどびゅんびゅん飛べるで」

「アカン。腕がないと困る、それにこれは偵察向けやろ?」

ユウジロウの一言で赤い光の主はアブルホールを消してOガンダムを出した。

「どうや、シールドとビームライフルにビームサーベル。

おまけで本家オマー・ジユの青い装甲のフルアーマー付き!」

指をパチンと鳴らしてOガンダムの姿を変える。

彼の発言したように緑の装甲ではなく、

青い装甲を纏ったF A Oガンダムが写っている。

「いやいや。俺らが1世代ガンダム持ったたら、めっちゃ怪しまれる」

ヒロミの発言で赤い光の主は絵を消した。

「…何が結局ええの??」

「赤いガンダムはないんか?」

「赤いガンダム? これか??」

ホウジのリクエストに赤い光の主はスローネツヴァイの絵を出す。

「それはオレンジ色や」

ユウジロウの発言で、赤い光の主は今度はアルケーガンダムを出す。

「異形で、余り好きや無いなあ」

ヒロミの発言で、赤い主は絵を消した。

「これ、俺が気に入つとるから出したないけど…」

赤い光の主は小声でぶつぶつ言いながらアストレアFを出した。

「これやこれ、角も付いとるし」

「いや、角つちゅうか耳やなあ」

頭脇の耳を角と勘違いしたホウジにヒロミがツツコミを入れる。

「そつえば、これつてガンプラやと赤いエクシア作れるやろ。」

せやから、エクシアとのコンパチにしてくれへんか?？」

ユウジロウは赤い光の主に注文を付ける。

確かに、実際のHGアストレアFはエクシアを組む事が出来る（実話）。

「せやね。これ一つしか最初はあげられへんから、サービスしとく」  
赤い主はパチンと指を鳴らしてアストレアを変化させる。

変わった姿はまさしくガンプラにあるような赤いエクシアだった。

「なあ、ゆうやんは何で知つとつたの?」

ホウジはユウジロウにコンパチを知っていたのか尋ねる。

「あー、今はガールフレンドの元彼がダブルオーのガンプラ好きや  
つたんよ。」

それで、2人で彼女の家に積んでるプラモ消化する際に嬉しそう  
に、

『これな、エクシアのランナー流用してんねん!』って言うてた  
んや」

「そついう事やつたんか、物好きな女の子やな」

「まーね。お友達になつた直後に、作つたガンプラが賞取つてビツ  
クリしたけどな」

ユウジロウは昔の事を振り返る。彼女はガノタだったのだろう。

「すっかり忘れとつたけど、あんたの名前は?」

ホウジは赤い光の主の名前を尋ねた。

「俺か、俺はヴァンIIヴェルクや」

赤い光の主は自身の姿を変えた。

真っ赤なシャツを着た小柄な赤い瞳で黒髪の日本人男性だ。

先ほどまで周りを回っていた絵を消して最初の宇宙空間へ戻す。

「うゝ あん・べー」、舌噛んだ。

舌噛んででむずいから、バンベルでええやろ?」

「しゃーないなあ。」うゝ」の音好きやのに…。

向ここの名前決めよか? そのまま日本人名を名乗るわけには行かへんし」

バンベルの新しい名前の提案に3人は悩んだ。

「あー、難しい。俺、国語苦手やし…」

「マイスター名か。ありきたりなのは名乗りたない」

「ん? 自分の名前を外国語読みにしたらええかな?」

悩みっぷりにバンベルはこの場にもう1人呼び出した。

紫の人型の光だったが、すぐに痩せ形長身の暗茶色ショート男に姿を変える。

服装は紫色系のラフな格好をしている。

「ーお悩みか?」

「そうや。アホで、自分の名前に迷ってる」

「あー、その痩せとる人。」夏野” って中国語読みるとどないなるんや?」

ヒロミはもう1人の男に尋ねる。

「”ピンイン”か、”シェイエ”やな」

「よし、これでオーケーや。俺はヒイ・シェイエや」

ヒロミは男の助言で自分の名前を”ヒイ・シェイエ”と決めた。

「バンベルじゃない方、春ってロシア語で何や?」

ユウジロウは男に質問した。

「名乗り遅れた。俺はリメイク”リロード」。

ロシア語で春は”ヴィスナ”やな」

「おー、マナはそう名乗るんか。何でその名前なん?」

バンベルはリメイクをマナと呼ぶ。便宜的に別名乗っているのだからうか。

「一種の洒落やね。アニニュー”リターナー、新しい・再生がおるし、

イノベイドの名前法則からして、いてもおかしいでしょ？」

「作り直すと再読か、悪くないな」

バンベルはマナの由来に納得してポンと手を打つ。

「決めた、俺はユン・ヴィスナや」

ユウジロウも名前をユン・ヴィスナと決めた。

一人だけうーんと唸ったままホウジは頭を抱えている。

「難しく考えたらアカン、ありふれた名前でええよ」

悩むホウジにマナは助け船を出す。

「名前は”ヘンリー”でええとして、名字に迷うなあ」

「それやったら、単純にオータムでええんとちゃう。」

まあ、最初の一人やし、ミドルネームのアルファベット入れたらええ」

「アルファベットか、Tでええわ」

「何でTなん？」

ヒイはヘンリーにミドルネームをTにした理由を尋ねる。

「いや、ぱつと”タイガース”の事が頭に過ぎったからや」

恥ずかしそうに言ったヘンリーの言葉に4人全員新喜劇ばりにずっこけた。

「―お約束か！」

マナが鋭く突っ込む。

「まあ、本人がええ言うてる事やしええんとちゃう。」

さて、ボケは此処までにして、行ってくるわ」

突如、バンベルは向こう側に先ほど見せた戦艦を実物大で出現させた。

アストレAFも艦首のGNブラスター先端上部に仁王立ちで現れた。だが、自動操縦で起動しているらしく、くるっと背を向け艦中央奥の射出口へ入って格納された。

「…あー、パジャマは不味いやろ。とりあえず、この服着とき」

マナがパチンと指を鳴らすと3人はマイスターのパイロットスーツ姿になった。

ヘンリーはあの赤エクシアにあった小豆色、

ヒイはミディウムブルー、ユンは零戦にある灰緑色がメインカラーだ。

「俺は、裏で資金とか情報規制をしとく。まずは、慣らし運転やないきなり、西暦2307年には飛ばへん。2293年に悲劇が起るからな」

「フェルトちゃんの両親が亡くなるからか」  
バンベルの言葉にユンはピンと来る。

西暦2293年はプルトーネの故障で、

フェルトの両親がマイスターのシャルを救助して亡くなっている。

「決めた、俺は”死亡フラグブレイカー”になる！」

ユンの言葉に突然ヒイが宣言する。

「宣言するのはええけど、自分の”死亡フラグ”を立てたらアカンで」

ヘンリーはヒイを諫める。

「分かつとる、それを含めて”フラグブレイカー”や」

「よし、俺は恋愛フラグを折る」

ヒイの宣言にユンは静かに呟く。

「え!？」

ヘンリー&ヒイは偶然耳に入って驚く。

「お前ら、嫁おるから氣い引けるやろ。」

此処は独身貴族の俺がハーレムエンドを目指す!」

『―変な女に手えだして、死亡フラグ建ちそうやな』

ユンの発言にバンベルは一抹の不安を感じている。

「じゃ、行ってきますわ!」

ヘンリーの声でヒイ・ユン・バンベルは宇宙遊泳で戦艦に乗り込む。乗り込むのを見届けると、マナは姿を最初の紫の光に変えて四散した。

本来ミサイルコンテナだった艦右奥下のカタパルトが開けられ、其処から乗り込む。

中央部は艦に平行してMSハンガーが6機置かれている。入ってきた入り口から奥右手にはアストレAFが固定されている。艦内が無重力状態の為、ヘンリーは頭に近づいて左アンテナにちゃんとタッチした。

ハンガーのMS搭乗口デッキに赤と青のボタンがあった。

「これが艦内重力切り替え装置やね。ぽちつとな」

バンベルが青いスイッチを押す。

重力が効き始め、自然と3人の高度が下がっていくので、

3人はデッキの手すりにつかまってデッキの内側へ降りる。

バンベルは体が浮いたままだった。超能力で浮いているのだろうか？

「あれ、バンベルは重力に従わへんの？」

「まー、”特別な存在”やし、もう少し宙に浮いていたい」

ユンにそう答えるとバンベルはおふざけで宙返りする。

タラップは移住スペースへ繋がる通路と連結され、

そのまま廊下を進む。

廊下はずらっとドアがある。

「この両脇は居住スペースやね。研究スペースとかは格納庫の後ろ」  
バンベルは一角の説明をする。

一度足を止め、部屋のドアスイッチを押す。

部屋はシンプルにPCとベッドに洋服棚とテーブルのシンプルな構成だ。

「必要最低限しかないから、後で好きに買いそろえとけ。か」

「そういうことやね。」

ちなみに、向こうはエロい本もビデオも電子コンテンツやからな。まあ、パス掛けとけば、わざわざ隠す為の仕掛けを作る必要ないし」

唐突にバンベルはエロ話を絡めてくる。

3人はバンベルの言葉にドキッとしていた。彼らの思考を読んだのだろうか。

「……………、お見通しか」

「手元に残る方が安心があつてええけど、技術上は紙媒体無いしな」  
「ねえ、おー」

レーティングに引っかけたりそんな発言をするヘンリーに、  
すかさずバンベルは首にチョップを入れる。

グキッ！という如何にもな音を立ててクリティカルヒットさせる。

ヘンリーは首をさすった。音の割には手加減をしたのだろう。

「我慢し！ 妄想とか十分n…、おほん。

これ、全年齢やったねえ」

「???」

バンベルのメタ紛いな発言に3人はきよんとする。

「悪い、メタ発言やった。『危ないネタは程々』につちゅう事や」

バンベルがドアを閉めて4人は突き当たりの部屋へ行く。

突き当たりの部屋は操舵室だった。外観はトレミー2まんまである。

ユンはフェルトの席へ、ヒイはラッセが乗っていた席へ座った。

「で、結局どの時代へ行くんや？」

ヘンリーがバンベルに飛ぶ時代を尋ねる。

「せやねー、2292年にしよか。MSの操縦も慣らしたいし、

ちよつと、とある悪ガキテロリストを家出少年にしとく」

バンベルは指を鳴らして艦の前方に量子ワープゲートを出した。

「えーっと、動かすのは”GN Drive Power On”

のボタンでええのか？」

「それでええよ」

バンベルの指示でヒイはタッチパネルにあつたボタンに触れる。

前面のスクリーンには”GN Drive Start”を先頭に、

ガーッとシステムチェック画面が出る。

「ん？ これって純正炉なんか?!」

ユンが画面にあつた文字を見て驚く。

「うん、アストレアも特製の純正太陽炉」

「特製って……?」

「本来やったら、木星で作るんやけど、

木星に近い太陽系外惑星で作ったとか何とか…。

正直、専門用語が飛び交って俺もよう分からへん」

「アンタでも分からへん事があるんか」

バンベルの”分からない”発言にヘンリーは少し驚く。

「メカ物は動かし方は分かるけど、俺の担当ぢやうわ。」

さつき会ったマナとは別の仲間が全部作つとるから…」

バンベルの言葉にワープゲートの向こう側に変化が起きた。

ゲートの向こうから青い粒子が現れた。

メインスクリーンはシステムチェックが完了し、

現在の画面は外を写しつつも、左下隅にアイドリング状態と表示されている。

カメラは青い粒子が光へ変化した様子を写す。

青い光は人型を形成して一瞬で消える。

消えた直後に突如、前の操縦席に先ほどの青い光の人型が現れた。

「あら、”鏡”さんが来たんか？」

バンベルは青い光に向かってそう話しかける。

青い光はバンベルの言葉に反応して姿を人間に変える。

その姿は大柄のチョイデブな茶色ロングポニテの整備工のような男になった。

「何だか、呼ばれたような気がしたので心配して来てみた」

「…もしかして、この人がメカ方面を準備した奴なんか？」

ヒイが恐る恐る尋ねる。

「せやねー。全部、鏡さんが用意したんよ」

「どうも、僕はハイデン”ミラージュ」。

姓がミラージュだから、鏡さんって呼ばれている」

「あら、アンタ標準語の人？」

鏡のイントネーションから思わず生まれを尋ねるヘンリー。

「標準語圏だけど、ご希望だったら似非で”関西弁”も喋れなく無い」

「無理に喋らんでええ。」

で、さっき話したたんやけど、特製の”純正太陽炉”って何や？」

改めてヒイはバンベルにぶつけた質問を鏡に尋ねる。

「本来、GNドライブは木星の重力で位相欠陥」、

物理学になるから、平たく言ってGN粒子製造マシンを惑星中心に打ち込んで、

その製造マシンを過酷な環境で起動させてドライブ本体に詰めて作る。

まあ、大元の位相欠陥は宇宙から採取しても、

高重力及び、高エネルギーの惑星は太陽系では少ないからね。

作るにしても、木星で作ったらヴェーダにバレるし、製造に20年も掛かる。

そこで、木星より重力が高くて太陽みたいな惑星を近場で探した」  
そういつて、鏡は近くにあった情報端末を操作しメインスクリーンを変化させる。

スクリーンには太陽系が映った後、ズームアウトして銀河を写している。

太陽系のある箇所は赤く囲って分かり易くし、太陽系から大分離れた所を緑で囲っている。

「この緑で覆ったのが麒麟座にある黄白色矮星”HD 33564”」。

この星は太陽よりも熱くて重く、星年齢は約30億年」

「太陽よりおつきい星ってあるんやなあ」

ユンは説明を聞いて宇宙の広さを再認識した。

「宇宙を探せば、大きい星は幾らでもある。

で、この星の重力は28.9 g。木星は2.34 gだから単純計算で約14倍。

細かい障害要素を加味しても、最悪10年くらいで作れる」

「じゃ、最速やと？」

すかさず、ヘンリーはベストでどの位で作れるか聞く。

「好条件なら4年で作れる。」

木星で1個作っている間に我々は2〜4個作っているって事だね。因みに、この船に乗つけた大型ドライブ2個とサブドライブの小型2個は合わせて50年掛かった」

「ところで、今乗せてないGNドライブは幾つ持ってるん？」

ユンは鏡に今手元にあるGNドライブの所有数を聞く。

「うーん。戦艦用の予備として大型がもう一基、

量産用にオリジナルの三分の一で作れるタウドドライブが10基、MSサイズ用は2個程かな」

「お、結構あるんやね。あー、タウこと擬似は危ないんやっただけ？」

ヒイが擬似太陽炉の危険性を指摘する。高濃度圧縮した場合、擬似では毒性を持つ。

「ゼロじゃないけど、皮膚が焼けるくらいの軽度だな。」

まあ、オリジナルも一定条件で毒性を持つけど、

こっちのドライブは木星より高重力だから毒性は薄い」

「あ、そうや。トランザムは非常時以外封印しとる。怪しまれるかな」

バンベルは鏡の解説に思い出して稼働制約を話す。

「…正直、壊しそうな気がするから途中まで操舵しておくよ。」

色々とメンテの知識も覚えて欲しいしね」

鏡はメインスクリーンに表示していた銀河の絵を消して、操作に使っていた端末の席に座った。

「よし、改めて”西暦2292年”へ出発や！」

ヘンリーの出発の号令と共に5人は端末で艦の操縦を始める。

一応、バンベルは浮遊を止め、ヘンリーと共に安全性上着席した。

「…メインGN大型ドライブ点火！」

ヒイの点呼で大型ドライブが起動を始め、キーンという起動音を立てる。

「GN小型ファンング及びGNブラスター、誤作動無し！」

ユニが火器関係のシステムチェックをする。正常のようだ。

「量子ワープゲート、座標修正。」

時間軸、西暦2292年1月1日世界標準時間00時00分00秒。

転移座標、太陽・地球間L4及びL2の火星寄り最小対角交差点」  
鏡が点呼してワープゲートの転移座標の修正に入る。

調整をしなければめちゃくちゃな方向に飛ぶ危険もある為、  
正確な座標と時間軸を入力し的確に飛ぶ為だ。

「おっと、惑星にぶつかるの不味いからGNフィールド展開！」

ラグランジュ点の場所によっては小惑星群にぶつかる危険もある為、  
鏡は念のためGNフィールドを展開させる。

「メインGNドライブ稼働率、双方50%突破。推進ユニット起動、  
―あ、船の名前忘れた！」

バンベルはここの一番で船の名前を付ける事を忘れた事に気付く。

「確か、フェシュレテのメイン艦もトレミーも学者の名前やったっ  
け??」

ヒイはみんなに問いかける。

「そうや、でも歴史は得意やない」

ヘンリーは肝心な名付けを忘れて若干動揺している。

「…何かええ名前無いの!？」

ユニは突然エラーを起こしたファングのエラー回復であたふた  
ている。

「こいつら、以外とエロいからな。何か丁度ええ名前無いの!？」

バンベルは鏡に相談をする。

「アレがこうで、都合の良い名前は…。」

あった！ アスパシア、いやエイスパシアだ」

ユニのサポートをしつつ、鏡は都合の良い名前”エイスパシア”を  
見つけた。

「ファングエラー回復！ 加速用にトランザム起動!!」

鏡のサポートでユニはエラーを修復し、加速用にトランザムを発動

させる。

艦全体が赤い粒子で覆われ、ゆっくり進み始める。

「こんどこそー。エイスパシア、発進！」

ヘンリーの号令と共に戦艦エイスパシアはワープゲートへ向け加速を付けて宙進した。

ワープゲート内部は緑の粒子で構成された風のような気体が絶え間なく流れている。

ほんの数秒で赤い粒子の輪っかのようなゲートの向こうに宇宙が見える。

エイスパシアはゲートを通過すると、出口のゲートは閉じられた。

出た宇宙は偶然にも小惑星群で覆われていなかったのでフィールドを解除し、

状況整理する為に艦を泊めた。

「ーにしても、エイスパシアって何や？」

ヒイは鏡にエイスパシアことアスパシアを尋ねる。

「古代ギリシャ時代にいた政治家の愛人。

教養が高かったらしく、サロンで勉強会を開いてソクラテスの”

弁論の師”と言われたらしい」

「でも、何処がエロいんよ？」

「いやね、この人”娼婦”だから」

ちよつと表では言えない話題で鏡は小声になる。

「ああ。つまり、fー」

「全年齢っ！！」

咄嗟に鏡はヒイに延髄をかまして、ヒイの頭を手元のディスプレイにめり込ませた。

ガッシャーと派手な音を立て、ヒイは額から血を流して気絶している。

「…うゝ あーっ！ やりすぎた！？」

鏡は自分のした事に真っ青になった。慌ててヒイをディスプレイから剥がす。

「……………。何とかなるのかな?」

バンベルはこの光景を見てこの先に若干の不安を覚えた。

一抹の不安を覚えながらも、彼らはこの”西暦”に降りたつた。  
彼らの未来はどっちだ!?

T o B e C o n t e r d …

## ぶろろーぐ・嵐の前途多難（後書き）

どーも、おまっさんでした！

ブログ公開です。

設定でイノベイダーを誤記しておりました。

後で直しておきます、申し訳ない。

全年齢と歌いつつも、R - 15 or 18 っぽい用語が2個出てますが。

ギャグなので問題ないでしょう（きつぱり）。

人物紹介にもありましたが、愛称とお名前が違う方がチートサイドに約2名。

これは、バンベル自身を含め4人とも本来の名前があったりします。本編に全く関係ないので、明かされる事はありません。

マイスターと本名みたいな関係ですね。

間違い等ありましたらご指摘歓迎です、

外伝なんかはさらっと読み&wikiの知識鵜呑みなので。

さて、次回予告。

ニーハオ！ 俺、マイスターのヒイ・シエイエ。

人呼んで、「ミスター・デスフラグブレイカー」。

3ヶ月も掛けてMS操作に慣れた俺たちに早速任務だ。

赤毛とべっぴん夫婦の救出に、止む終えず見捨ててしまった女性軍人の搜索、

それにそのままだと息子が大変な事になるお父さんの手助け、と。色々、フラグを折るのも茨の道やなあ。

…次回、みっしょんイチ・フラグ回収であります！

ーに、見ないとゴミ箱ポイポイやで！

…え、ネタが古い！？

## みつしよんイチ・フラゲ回収（前書き）

―時は西暦2292年。

人類は太陽光を資源として求め、後に”太陽光紛争”と呼ばれる戦争を起こした。

その影で来るべき時に備え、ソレスタルビーイングは兵器”ガンダム”のテストを行っていた。

…そして、同時期。

この時期の技術ではあり得ない戦艦”エイスパシア”の一味が活動を開始していた―。

## みつしよんイチ・フラゲ回収

「シーン1：プルトーネフラゲの破壊」

「…もう、これ位でいいでしょ」

そう言つて、鏡はエイスパシアから離れる事になった。

ワープしてから半年も経ち、基本的なMSの操作と整備を叩き込んだのだ。

操縦技術的には、まだ機体の性能に頼つてプロと互角というレベルである。

「今後の課題は、生還した人の中から戦闘技術を学ばしかないな」  
バンベルはそう呟きながら鏡を見送つていった。

MSハンガーにはもう一機MSが増えていた。

その名は”サキブレ”。2364年に存在する作業用のMSだ。

本来のサキブレとはカラーリングも装備も異なっていた。

カラーリングは色とりどりからドイツ戦車のようなレッドブラウン一色になり、

胸部レンズとヘッドの球体も緑から黄色に変わっている。

脛部にあったバランサーのような大型フィンと肘部のツールコンテナは外されて、

その代わりに背部にあつたサブスラスターを肥大化させ、

左にビームトーチアーム、右に作業用アームを格納している。

なお、ビームトーチは緊急用にビームガン及びビームサーベル機能も備えてある。

「さて、最初の任務は何や？」

鏡を見送つた後、ヘンリーはバンベルに最初のミッションを尋ねる。

「最初は、”プルトーネの悲劇から夫婦を救助”やね」

彼の話している”プルトーネの悲劇”とは、

プルトーネでテロリストのMSをGNコンデンサーの暴走で止めよ

うとして、

搭乗者であるシャルル・アクティカが動作不良で脱出できなくなり、救助に入ったルード・マレーネ夫妻が死亡した事故である。

なお、動作不良はあらかじめ仕組まれていた事であり、

この事件を切欠にマイスター・シャルは事故の後遺症で心身共に傷を負う事になる。

「なあ、この事件って軌道エレベーター”天柱”の事故やろ」

ヒイはそう言って資料用に読んでいた公式本の一頁を開く。

歴史について書かれている頁であり、”天柱”での出来事が書かれている。

「…これやと、同時に荒熊の嫁も同時に助けなアカンけど」

開いた頁には、

”人命救助を優先した為、セルゲイ、妻ホリー・スミノルフの搜索を断念。”

と書かれていた。

「―あ、忘れとった!？」

バンベルは本気で忘れていたらしく、ヒイの開いた頁を読み返す。

「マジか!？　ほぼ素人の俺らに同時に2人助けなアカンのか!？」

「無茶ぶりにも程がある」

ヘンリーとユンは同時救出に頭を抱えた。

「いや、アンタらは”ホリー救出”に行って貰う」

バンベルは少し考えて3人にそう告げる。

「何でなん!？」

ユンはバンベルに疑問をぶつける。

「あー、ルードは遺体が残っとるからね。死体役を俺がやる。

それに、有毒のGN粒子下でお前らやと確実に死ぬ」

「…俺らは不死身でない」と

「今は技術レベルでプロと互角やけど、

金ぴかGMとの決戦の時に技術も互角になるから、氣い抜いたら死ぬ。

死んでも保険がないわけやないけど、死んだらあかんわ」

「了解。油断大敵、怪我一生うちゅう事やな」

ユンは納得した。

「で、今回協力してくれるメンツの紹介！」

バンベルがそういうとこの場に黄色い光の人型が現れた。

黄色い光の人型は姿を変えた。

デコに見えるセミショートの新髪の新面のおっさんだった。

服は黒に近い紺色の作務衣を着ている。

「漸く出番か、すっげー暇だったけど」

「開口、いきなりそれか！」

「っていうか、アンタ喰っちゃ寝生活してたやん」

「諜報活動する上で、食生活は重要だろ？」

「いやいや、ファーストフード店しか行ってへんやろ」

バンベルと登場した男はのっけから漫才を展開している。

「あのー、作戦内容は……」

ヒイが進まないのので2人に口を挟む。

「あー、悪い。こいこー」

「テンダー」ブイツー。しがなのおっさんだ」

バンベルの言葉を遮って男はボケを交えて名乗る。

「……………」

「あー、そういう名前やったっけ？」

「俺より、若いくせにボケてどうする。」

受けなかったか……」

「いや、自虐の様に聞こえもつたから」

ヘンリーは申し訳なさそうにテンダーに言う。

「作戦はこういう事やね」

バンベルはこの場にキヤスター付きのホワイトボードを出す。

ホワイトボードには作戦があらかじめ書かれてあった。

書かれていた文字はこうだ。

『・バンベル&ルー（使用MS：サキユキ）

↓ 夫妻を気絶させコントロールを乗っ取り、  
バンベルはルードに化けて救出。

ルードは気絶した夫妻を乗っていたMSに乗せて離脱。  
死亡確認スキャン終了後にやってきた検死官に記憶操作。  
そのまま粒子化してお終い。

・マイスターチーム（使用MS：アストレAF）

↓ 誰か一人を選んで退路の確保をしつつ船へ誘導。

複数人いる場合は船もステルスフィールドを掛けた上で移動。  
バンベル側が先に到着した場合は、  
サキユキも出撃させる。

□

「お。あのサキブレ、名前付けたんや」

ヒイはバンベル達が使う”サキユキ”を格納庫のもう一機と気付く。

「区別用に一応やね」

「まあ、独自の名前付けた方が愛着が湧くしな」

うんうんとヘンリーも頷いている。

「アレか、”サキブレ”をサキガケ＋ブレイブや無くて、

”先触れ”の意味に取った上での先行きなん？」

ユンは名前の由来についてバンベルに尋ねる。

「せやなあ。まあ、俺らはある意味”先触れ”やからね」

「この時代において得ないMSを乗りこなしている、

…深けえな」

「お、ルード兄々々の”悟り”モードか??」

バンベルはテンダーの事をルードと呼んでいる。

「人がマジになっている時に本来の愛称で茶化すな。

俺だって、バカじゃねえよ」

ルードはやれやれといった感じでバンベルに言う。

「とはいえ、事後起きんのは後半年先やろ」

ユンが時間的余裕のある事に突っ込む。

「いや、何人救出できるか分からへんから、

資材搬入のお手伝いをせなあかん。

鏡さんの方からも”MS組立のお手伝いして欲しい”って、言われとるからね」

「…そういやあ、マナの言っていたアレは成功したらしいぜ」

「”ロバート”スタート”の救出か」

「”ロバート”スタート”ってフォンの親父やったっけ？」

確認の為ヘンリーはバンベルに尋ねる。

「そうそう。でも、マレーネのマイスター入りは変わらへんかった。仲間が死んだのがショックで、えらい落ち込んだのを見て入ったらしい」

「よく考えたら、マレーネがいないとフェルト生まれてなかったんじゃない？」

ルーは鋭いツツコミをする。

「あー、そこ忘れとったわ！

まあ、修正力って奴で助かったんかな」

「修正力？」

ヘンリーは”修正力”について2人に尋ねる。

「歴史は無理矢理変えようとする、大事で無ければ修正が入るのさ。」

それが修正力。

今回は、本人は死ななかつただろうけど、

本人が死んだ奴を大事にしていたからこそショックを受けた。

その光景をマレーネは深く心に受け止め、CBに入ったって事さ」

「波の力みたいなもんか。先行こうとすると、ちよつと戻されるっちゅうか」

「まあ、そんな感じやろね」

「分かった。改変する事って難しいんやね。

気合い入れよ、些細な事が重大な事になるんや」

ヘンリーは理解しつつも、改めて自分に気合いを入れた。  
時間はたっぷりある。

だが、些細なミスが何に繋がるか分からない。  
彼らはその時まで順調にいくよう、下準備を始めた。

「シーン2：今度こそ夫妻救出！」

それから更に半年。途中、艦内の拡張をしつつMSの建造に勤しんでいた。

導入されたのは色が変わったセムと呼ばれる無人の量産機だった。  
もとは、セラヴィーガンダムの強化プランだった3Gの増設オプションだが、

コスト度外視をしている物の、量産が容易い事もあり、  
内部を有人仕様化及び非変形した上で、

メインカラーも白からグレーホワイトに変わった。

無論、中の構造を知る為にパーツの状態で納入されている。

建造の際には鏡がやってきて、ガンダムタイプの構造を解説しつつ、  
端から見れば巨大なパーフェクトグレードを組んでいるかの様に、  
こつこつ1ヶ月掛けて建造した。

流石に、ドライブをはめ込む時は万が一の暴走を避ける為、

マイスター3人は外部カメラで一部始終を見ていた。

本来のセムと区別する為、マナの知恵を借りてヤフェテと名付けられた。

”ヤフェテ”とはセムの元がノアの息子だったことから、

同じようにノアの息子の名前からである。

元との最大の違いは膝のハードポイントである。

本来ならばGNサブマシンガンとGNシールドだが、

GNソード4の一部であるGNガンブレイドも装備できる点である。

GNシールド内蔵のビーム砲でも対処できないが、

やはり格闘兵器もエネルギーソードに対処するには必要不可欠。

そこで、開発当初はGNソード4が無かったとはいえ、装備拡張を

持たせ、

レンズで隠されているがアストレアと同様にコネクタもある。

実際問題、発展余地がある兵器は色々と便利なものである。

装甲及び自家製擬似太陽炉の出力限界などの都合で無理ではあるが、高機動ユニットことアヴァランチも装備出来なく無い。

量産性もあるのなら、このヤフェテは良いとこ取りである。

「しかし、このSーやなくてヤフェテもええもんやね。

色変えると、如何にも量産機って気いするわ」

完成したヤフェテ1号機を見てヒイは呟いている。

本来存在するグラビカルアンテナは内蔵になっている為、存在しない。

GN粒子制御が低下してしまうとはいえ、

中身である基本構造は今いる時代より21年も先を進んでいる。

その辺に関しては少なくともアストレア並みの制御は出来ている。

しかし、内蔵故の弊害もある。

飛行能力がグラビカルアンテナ装備機より短縮されてしまった。

大気圏内を空中飛行をしつつ火器を使う様なものなら、

使用加減によっては粒子切れを起こしてバランスを崩し墜落する。

まあ、3人は覚えているし、マニュアルもその辺は書いてある。

『問題はない、…と信じたい』は鏡の弁である。

訓練も一通り、木星の公転周期にあるアストロベルトである、

トロヤ群にて訓練を重ねてきた。

バンベル達4人の内、2人がセムに乗って救出する人に見立てて、

細かな小惑星群を崩壊した”天柱”破片と見なして訓練。

慣らす為に、最初はゆっくりと徐々にスピードを速めていく。

勿論、彼らはMS操縦に慣れたとはいえ、

避けつつも時々破壊しながら人を救助しなければならない。

こちらが到着する前に、相手が破片に当たってしまったえばアウトである。

向こうに存在する破片の軌道も読まなければならない。

装甲は完璧に任務を遂行するまでに、5〜6回も取り替えてしまった。

トロヤ群から悲劇発生現場へ向かう途中。

エイスパシアは全速力では火星軌道を通過中であり、地球標準時間にして事故発生までそろそろ1日を切る所だった。

「姿勢制御を加えた無重力空間って難しいなあ。

地に足をつけとる以上、どうも足が泳いでまうな」

「後は感覚の問題やね。

重力から無重力になる時、俺はどうしても気持ち悪なるけど」

「俺は”泳いどる”って感覚でやっとする。

まあ、障害物もあるから飛び込む様に体を丸めて抵抗をなくす感じが」

3人は各々宇宙への慣れ方を各々話し合っている様だ。

「……………、普通の人間は大変やね」

「しゃーないやろ、俺らと違って切替出来ひんから」

「まあ、僕らの場合は体が適応するというか」

バンベル・マナ・鏡は3人を見て、

改めて普通の人間が宇宙に適応する事に難しさを感じた。

「だからこそ、宇宙に慣れた人間は”ニュータイプ”になったのかな？」

「NTも人間の進化やからね。

逆に、宇宙生まれは地球の重力は重いんやろな」

マナと鏡は更に人類進化まで突き詰めた事をお互い語っている。

「……………、難しい事はよう分からへん」

「いや、SFの基本や（だ）から」

バンベルの分からない発言に、マナ&鏡は突っ込む。

「残り、事件の発生まで2400を切ったか」

「後は、俺らもミスせえへん事やね」

「向こうも大ボ力をしない事を祈るだけだな」  
バンベル達3人はそれぞれの思いで3人を見ている。

残り時間0435。艦の位置は現場まであと100kmを切っていた。

ここで鏡とマナは出て行き、入れ替わりにルーがやってきた。  
服は前の作務衣から黄色のパイロットスーツを着ており、  
髪のもで視界が邪魔にならないよう後頭部で束ねている。

「MSを操作する以上、気合は服からだな」

「あら、いつものおふざけは止めたんか!？」

ユンはルーが偉く真面目になってるのに驚いている。

「馬鹿野郎、人命が係わって尚かつ一歩間違えれば歴史が変わる。

巫山戯ている余裕はない」

真剣な顔つきでユンに反論した為、顔のマジ加減にユンも黙った。

「はーっ、落ち着かなアカン。俺らの手による介入が始まるんや」

ヘンリーは極度の緊張で手に汗を握り、武者震いをしている。

「アストレア、各部センサー及び火器制御異常なし！

…最後の最後でトラブったらあかんでー」

ヒイは入念にアストレアのチェックを入れている。

因みに、パイロットはヘンリーである。

海を潜る要領で簡単に宇宙に慣れ、回避技術もセンスが良かったからだ。

アストレアの装備も重装備ではなく、

火器は左腕ハードポイントにGNピストルが入ったコンテナのみ。

ビームサーベルも腰をエクシア仕様にして、

利き手用に左のフレキシブルラックしか装備されていない。

左はアストレアの様になっているが、

サイドのサーベルラックは不要の為内蔵された。

不要なハードポイントはレンズに取り替えられ、

肩装甲はアストレア仕様、頭はガンダムフェイスを隠すいつものヘッドだ。

これは余計な装備を排除し、その分機体を軽くして機動性を確保する為である。

自衛用の盾すら重い&面積を取る為、装備を諦めた。

最悪、GNフィールドを張れる様にシステムを弄っている為、盾が無くてもある程度なら大丈夫なレベルである。

片や、バンベルの方も準備を進めていた。

迅速に向かう為に修理用トーチユニットを外した分、

もう片方もアームを装備させた。

重量軽減による機動性の確保はもちろんの事、

何時でもビームが使用できるよう発生装置はアイドリング状態であり、

無駄な粒子量を少しでも減らす為である。

バンベルがドックへ戻ってきた。

自動操縦とはいえ、システムエラーを予測して今まで操縦桿を握っていたのである。

「…交代や。変わってくれ」

「俺が行きます。その次、お前やぞ」

ヒイがポンとユンの肩を叩きつつ操舵室へ行った。

「バンベル、俺もうMSに乗るわ。」

「いい引き締まるし、気持ちも落ち着きたい」

「えーよ、乗るとき」

「ヘンリーはそうバンベル告げてアストレAFに乗り込む。」

「歴史か、一遍人生やり直してみたいなあ」

「ヘンリーが乗り込む姿を見て、ユンは妙な事を呟く。」

「おいおい、緊張しすぎて精神病めたか？」

心配してルーがユンに声を掛ける。

「ちゃう。たればは出来ひん事は分かっとるけど、

どうも、こうやって歴史を改変するってなるとな…」

「…その場で最良でも、後に最悪があるからな。  
まあ、俺らも動かしただの大悲劇にならない様に、  
アフターケアにも尽力を尽くしている」  
「なあ、ホンマにアンタらはイノベイダーなんか？」  
今更ながらにヘンリーはそう言っただけで外部スピーカーで話に割り込む。  
「…………。KYだな、バンベルも言っただけじゃねえか。」  
「これがイノベイダーか」って」  
ルーはバンベルが以前に言った事を例に挙げてお茶を濁した。

―そして。

フェレシユテがプルトーネをテストしている宙域。

「”天柱”にテロリストが集まっています！」

ハナヨの言葉にシャルは少し考えていた。

当初は、ヴェーダの情報により自爆テロは知っていた。

だが、介入行為はガンダム情報の隠匿により、

ヴェーダは不介入の決定を下していた。

「…………。駄目、人を死なせたくない！」

―助けられる命があるなら、助けたい。

その思いがシャルにとって介入への思いがあらためて募った。

「シャル…」

シャルの悲痛に近い叫びが他のクルーも胸を痛んだ。

「ヴェーダに再提案します！」

テロリストのMSをGNドライブ暴走で止めます」

シャルの再提案にヴェーダが応じて、

”介入認可”のメッセージが彼女のプルトーネディスプレイに映る。

メッセージを受け取り直ぐさま、

シャルは粒子が届く様にプルトーネを移動させる。

「いいか、シャル。GN粒子の射程範囲はもう1km北西だ」

ジョイスの指示でプルトーネはもう少し移動する。

「万が一の事もあり得る。すまんが、2人もMSに乗ってくれ」  
「はい！」

イアンの予感からルードとマレーネは最悪を懸念し、アストレアとアブルホールに乗り込む。

「GNドライブ、オーバーブーストっ!!」

シャルの手で辺り一帯にGN粒子がばらまかれ、

”天柱”を襲撃していたMSはGN粒子によって動作不良を起こし止まる。

「シャル、そろそろ脱出しろ。」

GN粒子は浴びすぎると人体に悪影響だ」

「はい。プルトーネ、コアファイター起動さ」。

そんな、脱出装置が動かない!？」

ジョイスのアドバイスで脱出しようとするシャルだが、脱出する為のコアファイターが動作不良で作動しない。

彼方此方を操作するが、画面はエラーばかりしか出てこない。

「ぐっ、行くぞマレーネ！」

「ええ、行きましょう」

アストレアとアブルホールが発進しようとしたその時である。

「悪いな、ちよつと寝て貰うわ」

いつの間にかアストレア及びアブルホールにはもう1人いた。

振り向く前にルードとマレーネは頸椎に手刀を入れられ気絶する。

そう、バンベルとルードが任務通りコクピットに進入。

パイロットだった2人は不意打ちによって気絶したのだ。

ルードはコンソールに手を翳してパチッと火花を立てる。

画面は”自動操縦・アストレアに同調”と出されている。

手を離してルードはマレーネを背負ってコクピットから出る。

コクピットから足を話した途端に即座に下にダイブ。

マレーネが下になる様に落ちる。

ダイブして数秒でアブルホールは彼らの頭上から発進する。

GN粒子に汚染されない様に、

ルーはマレーネを下にしたのだ。

アストレアもコクピットハッチが開き、

ルードが放り出され発進する。

自動運転なのか、ルードはサキユキのアームでキャッチされた。

ルーはマレーネを抱えてサキユキに向かった。

サキユキは自動でコクピットハッチを開ける。

マレーネを放り込んだ後、アームで捕獲したルードを放り込む。

「スペース、ねえなあ」

ルーはそう呟いた後、その姿を一度粒子化した上で黄色いハ口になった。

「モンダイネエ、モンダイネエ」

サキユキはアームを使ってハ口を優しく回収してハッチまで持つてくる。

黄色いハ口が乗り込んだ後はハッチが閉められた。

重力が掛かっていない為、ハ口のアームで2人をきちんと乗せた。

コクピットはあらかじめ副座式になっていた。

3人は乗せられない事を想定されてか、ハ口を乗つける穴がある。

黄色いハ口はそのまま穴にはまる。

「オウチニカエルマデガ、エンソク！」

サキユキは2人と1匹を乗せてエイスパシアへと向かった。

片や、”プルトーネの悲劇”の現場。

アストレアにイアンの通信が入る。

発進に時間が掛かった為、心配して入れたのだ。

「ルード、大丈夫か!？」

「問題ない。若干、システムエラーが起こっただけだ」

「急いでくれよ、GN粒子を浴びると危険なんだ」

ルードが無事であることを確認してイアンは通信を切る。

一目で見れば確かに、ルードそっくりである。

だが、もし気功使いとかプロの作業員であれば気配が違うと感付く。

そう、外見はルイード本人だが中身はバンベルである。

コンソールを操作し、アブルホールのシステムをチェックする。  
同調している事を確認すると全速力で救出へ向かった。

「私、死んじゃうのかな…？」

嫌だ、助けてみんな…！」

アストレアとアブルホールがプルトーネに取り付く。

「シャルっ！」

「シャル、今助けてやる！」

声色とダミー映像でバンベルは2役を演じて作業を開始する。

アブルホールで機体をホールドして逆噴射しその場に固定させ、  
アストレアの手刀で的確にロック機構を物理的に破る。

程なく、コアファイターは起動してプルトーネから離れる。

「マレーネ、ルイード…！」

「大丈夫、すぐ離脱する！」

そうルイードが言った直後、プルトーネのドライブが爆発。

シャルはGN粒子を大量に浴びた直後、シヨックにより気絶した。  
アストレアは爆風で飛ばされ、

固定していたアブルホールはコクピットが吹っ飛び風穴が空いた。  
ハナヨは2人の生死を確認する為にサダルスードで調べた。

「マイスター2名、生命反応無し」

淡々とハナヨは現状を告げたが、

自分の今までの体験から心には失った悲しみが僅かに生じていた。  
コアファイターを回収後、シャルは集中治療室へ、

ハナヨの連絡によりOガンダムがアストレアを回収した。

正史とは違い、爆発直前に脱出した為、

シャルは左目に怪我を負っていない。

事故から数十分後、シャルは意識を取り戻した。

回りにはイアン・ジョイス・ハナヨがいる。

「る、ルイードは！？ マレーネは何処！？」

「…シャル、駄目だった。」

マレーネは爆発の影響でコクピットに穴が空いて、

ルードはGN粒子の長時間放射で―」

ハナヨはそう言ってシャルの隣の大きな硝子ケースを向いた。硝子ケースにはルードが入れられ、安らかな顔をしている。

「う、ウソ…。ルードっ！」

シャルはベットから起きあがって硝子ケースに近づいた。

意識を回復した直後の為、足がふらつきケースにのし掛かった。

「変なんじゃよ、プルトーネは直前まで整備は完璧だったのに」  
イアンはそうぼやいている。

だが、彼らは知らなかった。

これが、とあるイノベーターによる仕組まれた事を。

「うつつ、うわああっん!!」

シャルはショックですすり泣いた。

T o b e C o n t e r d …

## みつしょんイチ・フラゲ回収（後書き）

あとがき

大変お待たせしました。シーン2の公開です。

シーン3はこの後予定してましたが、

予想以上に2が長くなったので次回ということで。

Pを良く読んでいないので2世代達の介入くだりは半分想像です。

おまけの”おん・ざ・座談会”その1

バンベル「そう言えば、なんでルーは”テンドー”ブイツ”なん？」

ルー「うーん、メタると作者が良い名前が出なかったらしい。

そこで、どこから名前を引っ張ったとか」

バンベル「テンドーって、どこからやる??」

ヘンリー「まさかやと思うけど、スロット？」

発音は違うけど”サンダーV?”って昔あったやん」

ルー「らしいな。因みにボーナスBGMは初代Vと共に大好きだ。

異論は認めん」

バンベル「ヘンリーは何で知ってたん？」

ヘンリー「俺の奈良の知り合いにパチスロ好きがおってな、

そいつ、負ける時は十万吹っ飛ぶ金ぴかの台をよう打ったわ。

最近は大して儲からへんから止めたらしいけど」

ルー「うん、そいつとは良い酒が飲めそうだ。

4号機ユニバマシンは楽しかったなあ（遠い目）」

…ヘンリーの知り合いが打っていたのは、

自殺者を出したほど波が荒かった”ミリゴ”ことミリオンゴット。  
出玉が激しい為、”検定取消”という法律上の即時強制撤去が出た  
程です。

――1確リーチ目&リールバックライト演出って良いよね！

んで、次回予告。

…あら、俺が次回予告？

メイン差し置いて良いのかなあ？？

どうも、ハイデン”ミラージュ”こと鏡です。

――ついに、エイスパシア一行と正史の人が交わり、  
次々と救えなかった命を救っていく。

彼らの介入は新しい仲間を得て、加速を始める。

次回、”其の名はフロマデイトス”。

赤きエクストレアが大気圏に舞う――

ふうつ、我ながら古谷さんに似てたでしょ？

…え、若井おさむっぽかった？？

頑張ったんだけどな、グスン。

みつしゅん?? とろねへんその1（前書き）

私、王留美は次の情報を得る為に屋敷で下準備をしていた。  
ディスクの傍らには使用人の紅龍がいる。  
情報端末で細工を色々していた。静かな午後だ。

みつしょん?? とろねへんその1

「よお、じょーちゃん」

その男は突然現れた。

デコに見えるセミシヨートの金髪の髭面男だ。

服は黒い袈裟的なものを来ており、日本の坊主なのだろうか??

表情はニコニコしており、表情から心理は読み取れない。

紅龍は突然現れた不審者に咄嗟に私を守るように構えを取る。

「エージェント・ホアンロン、怪しいもんじゃねーぜ」

「!?!」

男は紅龍が現れても、表情を崩さず軽い口調で私に語りかける。

「貴様、何処で俺の名前を…?」

「んー、ひ・み・つ。まあ、ソレビの関係者だし」

ソレビ? C Bを略していったのだろうか。

「…一体どうやって進入したのよ?」

動揺しつつも、男に進入方法を尋ねた。

「それもきぎょー秘密。」

おいしー話がありますぜ、りゅーみんちゃん」

「!?! 留美様を軽々しく呼ぶな!」

紅龍は軽々しく呼んだ男に激怒し、気を荒立てた。

私は男の”おいしい話”に興味を持ち、手で制止する。

「お待ちなさい、紅龍。で、話というのは…」

男は笑顔を作っていたが真剣な表情に変わる。

「話が早いね。」

まあ、このままだと手駒に”Nice boat”されっから、

2人ともお幸せに、尚かつおたくの望んだ”人生の自由”もあげ

ちゃうわけ」

男の言葉に私は動揺した。

普通の生活を送っていた私に突如名門の王家の継がされた辛い過去、

CBによって世界が変革されれば”人生のやり直し”を出来ると信じていた。

男の”Nice boat”の意味がよく分からないが、恐らくは手駒にする者によって殺されてしまうのだろう。元々、CBの活動には興味はない。

男の真意は不明だが、事実ならば掛けてみたい。

「良いでしょう、話に乗ります」

「お嬢様!？」

「しかし、貴方の真意は何でしょうか？」

メリットでもあるのでしょうか」

「んー、可愛い子を死なせるのは後味悪いのさ。

じゃ、もし俺と出会わなかった結末はこれ!」

男の目が突然黄色く光った。目を閉じる事が出来ず、見入ってしまった。

視界が突如真っ暗になり、紅龍と男しか見えなくなる。

「で、おたくはCBを裏切るわけ」

足下に映像が映った。映像は何年か後らしく、私の姿が成長していた。

私自身がトレミーらしき戦艦の位置を、何者へ情報を流している。

さらには衛星兵器らしき設計図を見て資金提供をしている光景だ。

「嘘だ!?! お嬢様がそんな事をするわけがない!?!」

紅龍は映し出された映像に混乱している。

「んでもって、この娘が…」

映像が切り替わり、チーム・トリニティのネーナが映し出される。

ネーナは何者かと連絡を取り情報を流している。

映像が切り替わり、私の知らない男が写る。

少年のような黄緑の短髪の男、映像で私に対して何か言っている。

「こいつはお前をけなしているのさ」

男が音声が聞こえない為、解説を付け足している。

映像が切り替わり、トリニティの艦がネーナの手によって沈められ、

私と紅龍が”エクリップス”に逃げ込んだ光景。

「な、何て事を……!？」

映像が切り替わった。私が逃げた先で紅龍と口論している。

「上手くいかなかったから、近くの間人を捌け口にしたと」

「……お、お嬢様」

紅龍はショックで顔が青ざめている。

映像が切り替わった。トレミーチームにいる刹那という青年が、

私に同行を求めるが私はそれを拒絶した。

そして、そのままシャトルへ逃げ込んでいる。

映像が切り替わる。コロニーの外だ。

私の乗ったシャトルが発進したが、其処へスローネドライが待ち構えていた。

シャトルを撃ちシャトルは木っ端微塵になる。

「ーね、おたくはお星様になってしまったと」

「嫌、こんなの嫌ーっ!」

悲惨な最期に思わず私は悲鳴を上げた。

「ああ、青ざめたから見せなかったけど、

おたくもあのネーナって娘に、りゅーみんちゃんを庇って射殺されているから」

男は紅龍を可哀相にと思いつつ肩を叩いている。

「……………」

「だから、俺の指示に従ってくれれば、

残念な結末もこの通り!」

足下の映像が切り替わる。

何処かの大学だろうか、楽しそうに私がこの学生らしき人と一緒に談笑している。

学校の外では、普通に友達らしき人と露天でアイスを食べ楽しんでる。うだ。

「画面の外だけど、おたくもこっそりついて行ってるから」

男は紅龍にそう付け足している。

「コネの為の愛人活動」もしなくて良いのね？」

私は思わずいかがわしい事を聞いてしまった。

コネの為なら色んな男に抱かれ、肉体関係だって結んだ事もある。

「もちのロン！ 大事なm：おっと、失った物は取り戻せないけど、女の子としての青春は取り戻せませうぜ」

「お嬢様。私は、お嬢様が幸せならば付いていきます」

紅龍は覚悟を決めたように私を真っ直ぐ見つめた。

「紅龍：。分かりました、貴方の指示に従いましょう」

「おーけー、おーけー。じゃ、回想お終い！」

男は指をパチンと鳴らし、視界を元に戻した。

「とはいっても、今のところは普通に壊滅するまで大人しくしてて」

「か、壊滅ですって！？」

男の発言に私は驚愕した。CBが壊滅する！？

「さっきの写った男がCBの裏切り監視者と共にヴェーダを掌握。付いてきた監視者も殺して連邦政府を牛耳るのさ」

「なんと言っ事を…」

「この辺を俺は動かせない。忠実な振りをして貰うのさ。壊滅したら、さっき見せた事を2年程体験して貰う。」

もちろん、その間は俺らの仲間が全力で何とかする」

「本当に、自由を得て良いのですね？」

私は思わず念を押す。

「もちもち、おにーさんウソ付かない。」

それに、おたくは他人に頼ってしまっ節が見える」

男の後の言葉が鋭く心に刺さった。

「：未来見ようぜ、他人と向き合って初めてビジョンが見える。心を開かなきゃ、孤独になって果ては破滅だ」

男の言う通りだ。冷静に振り返ると傍らには紅龍がいた。

そして、家の財産を使い金の力で有無を言わさず従わせていた。これは、私にとっての己の改革への第一歩かもしれない。

「そう、ですね。自分だつて変われますものね」

「あとは、俺らの指示に従つてあのガキに係わらない事。そうすれば、全てが終わつた後ハッピーエンド。

”世界は変わりましたとさ、おしまい”。

今回は普通に仕事をしとけばおっけー、

ネーナちゃんの方は俺が手を回しておくから」

「手を回す…？」

紅龍は男の発言に疑問を持った。

「トリニティにも細工が必要なのださ。

ネーナちゃんは心が未熟だから、簡単に恨みを買う」

私はネーナの性格を思い出した。

彼女は確かに、幼っぽく倫理感が欠落し自分勝手だ。

気に入らなければMSで娯楽施設を襲撃するのもあり得る。

「それに、おにーさん達がいなかったでしょ？」

「言われてみればそうね、映像にはなかったわ」

私は映像を振り返る。兄のヨハンとミハエルはいなかった。

「さっきの”裏切り者”によつて、用済みとして始末されるのださ。

ネーナちゃんはせっせさんに命を救われ、おたくに保護された」

彼の言っている”せっさん”とは刹那の事であろうか。

「で、あのガキと繋がりを持ったから反感を買つて”Nice b

oat”さ」

幼い故にCBの信念から逸れた事をした為、

裏切りと見なして私は殺されると。

「おにーさん暗殺を阻止して、成長させるのださ。

で、おたくと合流してサポートに回す。

でも、トリニティの存在自体、”裏切り者”の息が掛かったもの

だからね。

まあ、上の”いらね”宣言でアジトを壊滅させられ、

自然とおたくに身を寄せる事になるさ」

「と、いうと？」

私は”息が掛かったもの”の言葉に疑問を持つ。

「『ガンダムで憎しみを扇動して、統合の一致団結』だわな。

ヴェーダの計画引いてはイオリアの計画とは大いに外れている。

そんな事じゃ、統一しても火種は無くならんさ」

男の言う通りだ。急速な統合の動きは何処かで齟齬を生じさせる。

CBはそれを徐々に行う事で、

CBを抑止力として根本的に人の意識を改革するのだらう。

「説明は此処までだ。俺はトリニティの説得へ行ってくる」

「貴方、名前は？」

私は男の名前を尋ねた。

「俺か、俺はテンダー・ブイツー。裏の交渉屋さ」

男はそう名乗って窓に近づき、其処から飛び降りた。

私と紅龍は後を追いかけて窓を覗いたが、

姿は無く微かに黄色い粒子の光が見えるだけだった。

ルーは王兄妹と交渉後、直ぐさまトリニティの元へと向かった。

アジトへ向かうと案の定、出発直前の3人がいた。

ルーは通信をジャックし、引き留めた。

「おい、ちょっとタンマ」

ルーは実体化し、下からスローネ3機に向けて手を振る。

その姿を発見した3人は発進を取りやめ、MSから降りてルーの元へ来た。

「オジサン、用事って何？」

「おたくに良い事を教えてやる」

「貴様、何者だ!？」

「うちのネーナを軽々しく呼ぶな!」

兄2人はルーに対して警戒をしている。

「まー、ぶっちゃけるとおたくらこのままだと死ぬわ」

「何!？」

3人は突然の死亡宣言に戸惑いを見せる。

「おたくの上司、ラグナいやその上の御上によって討たれる。大好きなおにーちゃんを失ったネーナちゃんはリユーミンに保護される」

「ば、バカな。ラグナがそんな指示をするわけがない！」

ヨハンは驚きつつも反論する。

「冷静な頭で考えてみる、派手な事したら大衆に恨み買っぜ」

「憎まれてこそ”武力介入”だ。覚悟は出来ている」

「大衆はその恨みで団結して、大きな力となる。」

チリと積もれば山となるんだぜ？」

「へっ、そんなチリ何ぞ叩き潰すまでだ！」

「ところがどっこい、おたくらは3人しかいないんだぜ。」

ネーナちゃんのMSはろくな武装はない。

情報をリークされて集団で襲撃されて見る、

スローネは有限の擬似太陽炉、燃料切れでフルボッコさ」

「兄い達は弱くない、やられるわけがない！」

「ーネーナの反論マジサイコー！」

……じゃなくて。いや、ホントに物量作戦されたら死ぬよー」

ルーはネーナの反論に萌えつつも、真顔で説得に掛かる。

ヨハンは落ち着いてルーの言葉を考えた。

「……そうだな。我々のドライブは純正ではない。

粒子量が尽きてしまえば、やられてしまうのは当然だ」

「兄貴！？」

「ヨハン兄い！？」

「で、集まった力は”裏切り者”によって擬似太陽炉を手に入れ、

おたくのMSで取ったデータで量産機を作りCBは壊滅。

集団で戦うから、船を使う。

だからこそ、重いスターターを外され大群でやってくる」

「…………。道理で、動力周辺が独自構造で部品が少ないと」

ヨハンはトリニティ艦で修理した事を思い出す。

動力部近くが破損して、一度装甲を外した際に動力付近の構造を見たのだ。

「試金石だったのさ、全ては”裏切り者”の計画修正の為」

「け、計画修正!？」

3人はルーの発言に驚いている。

「監視者は人間である以上、独占欲があるものさ。

イオリア計画を自分の物にして、己はその頂点に立つ。

滑稽な話さ、裏切りを見据えた上での策だっただけに見えるだろうに」

「我々のしてきた事は、下らない事に荷担していたと？」

ヨハンはルーの発言にショックを受け、崩れ落ちている。

「当然。イオリア計画をバラしちゃうと、

CBの武力介入によって、CBが抑止力となって人類の意志を統一させ、

人類同士で喧嘩したまま外宇宙に進出させない。

って事だわな。

まあ、もし太陽系以外から生命体がやってきても、

喧嘩したままじゃ紛争で自滅して話し合いすら出来ない」

「そこまで、イオリア」シュヘンベルク考えていたというのか」

「宇宙には色んな奴がいるからな。

”言葉が通じるのなら、人類以外でも仲良なろう!” って事で、人類の变革を望んだんだろうよ。

それこそ、ネーナちゃんの脳量子波を人類にも使えるようにするのさ」

「そ、そんな!？ 普通の人間もヴェーダにアクセスできちゃうの」

「ヴェーダにはアクセス権限があるだろうから、それは無理。

元から、喋る事の出来ない人とかいるでしょ、

そういう人とも分かり合えるのさ」

「口に出した言葉ではなく、思いを直接響かせると」

「そーそー。それでも、脳量子波操作が出来る人間が、

ヘンな波を受信して精神がおかしくならない様に、遮断装置も開発しておいて必要な情報を取捨選択と」

「確かに、俺のイライラが伝わっても迷惑だしな」

「do-dai? 上の命令に従って、

『ハイ、死にます』何て命令受けるか？」

ルーは改めて3人に意思を確認する。

「私は、死にたくない！」

ヨハン兄いとミハエル兄いがないと生きていけない」

「俺だつて死にたかねえよ、ネーナを残して死ねるか！」

「決まつたな。2人が言う以上、俺は生きる事を選ぶ。

屈辱を耐えて生きながらえる事は大変だが、

人間である以上は生存本能があるものだ」

「決まり！ じゃ、おたくら待機ね」

ルーはそう言つて空を見上げた。3人もつられて空を見る。

空はあのフロマデイトスの所有するエクストレアと、

セダクピアが南の方向へ飛んでいった。

スローネには目をくれず一直線だ。

「アレはデイトスのガンダムじゃねえか!？」

そう、ミハエルが言つた後、MSの戦闘音がした。

「…情報がリークされてドンパチの真つ最中。

このまま、此処を出て行ったらアジトはお釈迦だ」

「デイトスは助けてくれるのか？」

「ウチの知り合いが助けたいって事で、口添えをして貰つた。

戦闘が終わつたらコイツの指示に従つて、指定の場所へ行く事」

そう言つて、ルーは何処ぞの一門の縦縞・横縞変換マジックばりに、何も無い左手に手を回した後、右でから黄色いハ口を出した。

「ハ口か」

「ムラサキボウスニアイタイ！」

出された途端ぴょんぴょん跳ねている。

黄色ハ口が五月蠅く跳ねるので、ネーナは洪々HAROを呼び出し

た。

「オマエ、ダレダ!?」

H A R Oは見た事もない黄色ハ口に警戒している。

「オマエ、マルカジリ」

そう言つて黄色ハ口はH A R Oを凝視する。

通信レーザーみたいな物を目から照射している。

システム更新の変な音を出していたが、

通信レーザーの照射が終わると音が止まった。

「…オマエ、オレノオジサン?」

「オジサン! ダメオッサン!」

黄色ハ口の問いかけにH A R Oも反応する。

「黄色ハ口も仲良くなつた事だし、俺は帰るわ」

「シボーフラグ、ミエル」

「はいはい、お前も気をつけるよ」

「アイヨー」

黄色ハ口に憎まれ口を叩きつつ、ルーは去った。

黄色ハ口は去つた途端にヨハンの肩に器用に乗る。

「オマエ、カシコイ。オマエニツク」

「ヘンなハ口だなあ」

「私のH A R Oが可愛いけどね」

「ネーナ、モット!」

「調子に乗るな!」

H A R Oのもう一声にネーナは軽くどつく。

「しかし、私のスローネにハ口を乗せる席はないが」

ハ口を貰つた事は良かったが、

アインにはハ口を乗せる凹みはない。

「シンパイゴムヨー! マサツデクツツヨ」

黄色ハ口はそう言つて肩から背中にぴたつと転がった。

「それなら問題ないが…」

脅威の吸着力にヨハンとまどいつつも、

3人は万が一の為にMSに乗り込んで時を待った。  
乗ってから数分後、

戦闘音が消えてディトスのガンダムは飛び去っていく。

「おい、黄色いハロ！」

あのガンダムの事を話せ」

ミハエルがアインを中継して黄色ハロに尋ねる。

「モクヒケーン！」

オバアチャンハイッツテイタ、

イラナイジヨウホウハカエツテコンランスル」

黄色ハロはそう言つて黙りを見せた。

「ちっ、ケチくせえな」

「ダイジョーブ、ゴリユーシタラハナスヨ」

「ふむ、情報規制を敷いて下手な行動をさせないと」

「ソーソー、よはんハカシコイナア」

「ヨハン兄い、ミハエル兄い、誰か来る！」

ネーナはセンサーの反応から外のカメラを写した。

赤毛のぼさぼさロングの男がやってきた。

小声ではあるが、

「糞っ、ソレスタル何とかの妨害工作で、

アジト潰しに失敗するとは……」

とぼやいている。

「アイツ、誰だよ？」

「あたし、見た事ない」

「怪しいな」

「オリルナ！ アイツキケンー！」

黄色ハロがやってきた男に対して五月蠅くしている。

「…、ミハエル、ネーナ。MSから降りるな。

奴の言っていた刺客かもしれんな」

「りょーかい」

「わかった、ヨハン兄い」

2人もヨハンの指示に従い乗ったままで待機した。

「ツウシン、ツウシン！」

「ミチアンナイスルヨ」

「リヨールカイ、メイレイカ」

カメラの映像がシャットアウトされ、地図が映し出された。

「奴の言っていた合流地点か。行くぞ、ヨハン、ネーナ」

「了解！」

スローネ3機は黄色ハ口の誘導でこの場から去った。

突然発進した事に対して、やってきた男は驚き、

「待て、この野郎！」と怒鳴りつけているが聞こえていない。

ネーナは気に入らなかったらしく、

空に上がるまで男に対してアツカンベーしている。

勿論、この男こそサージェスであり、

国連軍がアジト壊滅出来なかった為、直接やってきたのだ。

勿論、あらかじめ妨害工作をした為に時間が掛かっている。

「シユクホー、ハツシャ！」

黄色ハ口はそう言いつつ、機体制御システムを弄った。

アインは飛びつつも空いた右手でハンドガンを握り、

後ろ手でサージェスに向けて空砲を発射した。

「なっ！？」

空砲とはいえ、風圧が物凄いわに近くの大木に激突。

そのまま、サージェスは気絶したとさ。

「…勝手な事をしたな」

勝手にMSを弄られたのでヨハンは片眼が吊り上がっている。

「オミヤゲー、アノアジトハイキスルラシーヨ」

「バレちゃったもんね」

「シザイテツシュースルタメノ、ジカンカセギ！」

「え、あの場所にあったもの拾ってくれるの！？」

ネーナは黄色ハ口の発言に驚いている。

気に入っていた物があつたのだらうか。

「モツタイナイカラネー、ニチヨウヒンハリサイクル！」

「ありがとう、黄色ハロ」

「ねーなのホメコトバ、マジゴホウビ！」

黄色ハロは照れて耳をバタバタさせている。

「随分、あのオヤジも親切だな」

「聞くのを忘れていた。」

黄色ハロ、あの男の名前は？」

ヨハンはドタバタで名前を尋ねる事を忘れたので、

黄色ハロに接触した男の名前を尋ねる。

「てんだ」ぶいつー。

”ウラノコウショウヤ”ってジヨーシテルケド、

アイツハタダノ”マダオ”ダカラ！」

「…まだお??」

「マルデ・ダメナ・オッサン！

アタマヲトツテ”マダオ”!!」

「……………」

3人は黄色ハロの毒舌酷評に啞然としつつ、  
目的の場所へ向かった。

To be c o n t e r d …

みつしょん?? とろねへんその1（後書き）

元は出す人物のリストアップ作業をしていたのですが、トリニティ側のメモを書いていたら、

執筆の神様が降りてきましたとさ。

シリアスやりつつ、ボケもチョコチョコと。

ルーの”ネーナのゝゝ!”は”くぎゅ病”ですな。

さて、今度こそ本編残りシーン書けるとイイナ！（何

## 飯完結に伴う、お詫び（前書き）

元々は3月に2話を投稿する予定でしたが、  
書いてる矢先にあの311の大震災を目の当たりにし筆が止まりま  
した。

テレビのあの光景を見て呆然。

話を続ける気力も無くなってしまい、

大変申し訳ないですがこの後の粗筋を持って飯完結と致します。  
楽しみにしていた方には重ね重ねですが大変申し訳ないです。

## 飯完結に伴う、お詫び

其の名はフロマデイトス（ 1話掲載の原文）

― ついに、エイスパシア一行と正史の人が交わり、次々と救えなかった命を救っていく。

彼らの介入は新しい仲間を得て、加速を始める。

次回、” 其の名はフロマデイトス”。

赤きエクストレアが大気圏に舞う―

## ミスター・マスカレード

突如、重要なファクターであるグラハムを救うと言い出すヘンリー。物語すら覆す行動に困惑するチート介入者達。

教師であったスレッジも教え子の未来に失望したらしい。

同時にビリーも攫い、物語は明後日へ動き出す。

次回、” ミスター・マスカレード”。

ブシドーもとい、グラハムはどっちへ向かう!?

## 水瓶の調停者ガンダムセタクピア

アストレアに続いてガンダムタイプがロールアウト。

同時に、新たな悲劇も迫っていた。

悲劇を回避しつつ、テンダーはいらぬ事に介入する。

次回、” 水瓶の調停者”ガンダムセタクピア。

人は死んで償うよりも、生きて償う事が最善か―

「とろねヘンその1」

リリース済みですので、そちらをどうぞ。

## スターダスト・ヴィスナ

ついにCBと国連軍の総力戦。

影で動くフロマデイトスも主力の影で動き出す。

ニールを救い出すユンだが……

次回、”スターダスト・ヴィスナ”

因果が彼に襲いかかる――

ブリッジ・蠢く狂氣的悪意

遠く離れた”HD 33564”。

GNDライブを製造中の真っ只中、

介入者の天敵が強襲してくる。

次回、”ブリッジ・蠢く狂氣的悪意”。

究極の悪意は、新たなる介入をもたらす――

とろねヘンその2・実現した日常

与えられた日常を楽しむトロネチーム。

様々な、出会い・別れを通じて彼らは革新へ歩み出す。

次回、”とろねヘンその2・実現した日常”。

繋がる日常、それは新しい第一歩。

イノベイド・コンタクト

動き出すイノベイド。フロマデイトスにもイノベイトが居た。

組織の為、あるイノベイドは彼方此方へ奔走する。

次回、”イノベイド・コンタクト”

彼は介入者と共に、別れた親子を繋げられるだろうか――

崩れゆく天の御柱

暴走するアロウズ。そのやり方は余りにも過激だった。

力の誇示の為に人命すら躊躇する。

それは、世界との決別だった。

次回、”崩れゆく天の御柱”。

過激なやり方は、恐怖支配と何ら変わらない――

俺たちの対話<sup>やりかた</sup>

与論は反乱軍へと傾き、人々の意志は一つになっていく。  
望むままの導きは過ちへと繋がる。

次回、”俺たちの対話（やり方）”

憎しみの連鎖が消える時、人々は分かり合える――

先駆者との調和

束の間の平和も、ELS襲来により一変する。

表舞台の影で、フロマデイトスは限界までの人命救助を始める。  
全てが終わった時、別れが待っていた。

最終回、”先駆者との調和”。

別れは、すぐそこに近づいている――

## 仮完結に伴う、お詫び（後書き）

稚拙ながら最後まで読んで頂きありがとうございました。

今度投稿する小説は最後まで完走できるよう努力したいと思います。

仮完結なので余裕を見て補完していきたいです。

最後にですが、読んでくれた皆様本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7363q/>

---

だぶるお～こわれ逆行で行こう！

2011年5月31日22時48分発行